

1930年代初頭のプロレタリア運動における紙芝居

浅岡 靖央

はじめに

昭和初期において、プロレタリア運動の中で紙芝居に関心が寄せられていたことについては、すでに石山幸弘が明らかにしている。石山は、1932（昭和7）年1月発行の雑誌『子供の教養』第4巻第1号に掲載された座談会「子供に迫る左傾運動に対して」において、プロレタリア演劇雑誌に紙芝居の作り方を解説する記事が掲載されているという発言が見られると指摘し¹、「『教育紙芝居』の始発はプロレタリア文化陣営をもってなされた」²とした。

しかし近年、高塚明恵によって、その紙芝居の作り方を掲載した記事が、1930（昭和5）年7月発行の雑誌『プロレタリア演劇』第2号に掲載された、川北三郎「プロレタリア演劇講座 紙芝居に就いて」であることが示され、しかもそこで解説されている紙芝居が、いわゆる「立絵紙芝居」（現在のペープサートに似た、紙に描かれた人形による舞台劇）であって、「平絵紙芝居」（現在見られる、連続する一枚絵によって構成される紙芝居）ではないことが明らかにされた³。

子どもを対象にして、街頭で駄菓子を売るための客寄せとして演じられてきた「立絵紙芝居」が「平絵紙芝居」へと変化したのは、1930（昭和5）年4月だとされている⁴。高塚は、川北の記事が執筆された時期は、「平絵紙芝居」の存在を世に知らしめた『黄金バット』登場以前であり、「平絵紙芝居」がまだ知られていなかったと考えられるとし、

平絵の街頭紙芝居の大流行を見る前に紙芝居の有効性に目をつけ、活用を模索していたプロレタリア演劇の動向は今後の研究課題である⁵

という留保の上で、『プロレタリア演劇』誌が発行された時点において、「プロレタリア演劇での紙芝居利用が平絵、さらには印刷にまで及んでいた可能性は否定することができる」と指摘し、「平絵紙芝居の教育的利用および印刷・出版」については、これまで通り、1932（昭和7）年に始まった、今井よねによる紙芝居製作が始発と言え

るのではないかと結論づけた⁶。

本稿は、そのプロレタリア演劇を含む、1930年代初頭におけるプロレタリア運動の中において、紙芝居がどのように認識され、さらに使用されていたのかを、一次資料から可能な限り明らかにしようとするものである。

なお、以下本文中の引用に付された下線は、すべて筆者（浅岡）による。

1. 児童問題研究会と紙芝居

1938（昭和13）年に日本教育紙芝居協会を創立し、その後の教育紙芝居普及に大きく寄与した松永健哉は、プロレタリア運動においても一定の役割を果たしていた。拙稿「松永健哉と紙芝居『人生案内』」⁷でも示したように、松永はプロレタリア運動に参加する中で、その活動の一端を担った「新興教育研究所」や「日本共産青年同盟」といった組織のメンバーとして何度も検挙されている。

そして1932（昭和7）年9月、最後に検挙された際に転向手記を書くことで起訴猶予になって放免された後、1933（昭和8）年4月に東京帝国大学セツルメントにおいて仲間たちとともに「児童問題研究会」を設立し、同年末にはその活動を通して紙芝居『人生案内』を製作して世に送り出している。松永自身は、後にその紙芝居製作のきっかけを、今井よねの福音紙芝居に出会ったことだと記している⁸。

しかし、同年7月に創刊された児童問題研究会の機関誌『児童問題研究』各号を見ると、この研究会が、その発足当初から紙芝居に対して強い関心を持っていたことがわかる。一例として、『児童問題研究』創刊号に、この研究会における「研究の範囲と問題の取り上げ方について指針を与へた」⁹ものとして掲載された「児童問題研究会研究コース」を見てみよう。

「研究コース」は第一部から第六部までの六つの「研究部」に分けられているが、その「第一部 児童芸術研究部」の中に、「A、童話」「B、美術」「C、唱歌—ユーギ—童謡」「D、児童劇」に続いて、「E、紙芝居、人形芝居、影絵芝居」という項目が見られる。そして、その内容は次の通りである。

日本及世界に於ける紙芝居の起りと現状

紙芝居の芸術的教育的価値について

紙芝居の作り方やり方

人形芝居について

影絵芝居について¹⁰

他の二つ、人形芝居・影絵芝居と比べてみれば、紙芝居に対する関心が一段と強かったことは、その関心の具体的な広がりからも明白である。さらに、『児童問題研究』には、新聞・雑誌の記事を紹介する「校外教育資料」欄がたびたび掲載されているが、「効果百%の紙芝居」・「紙芝居の改善」（ともに創刊号）、「子供の世界を支配する紙芝居」（第1巻第3号／1933年9月発行）など、紙芝居関連のものが目立って取り上げられている。

こうした紙芝居への関心は、当時すでに子どもたちから圧倒的な人気を獲得していた街頭紙芝居の隆盛がその背景にあることはもちろんだが、はたしてそれだけであろうか。前述したように、街頭紙芝居は1930（昭和5）年に「立絵紙芝居」から「平絵紙芝居」へとスタイルが変化し、同年末にその第三作として『黄金バット』が登場したことによって急速に普及していったことが知られている。一方でこの1930（昭和5）年は、1920年代後半に始まった日本におけるプロレタリア運動において、教育を焦点とする合法的組織として8月に「新興教育研究所」が創立され、同じくその非法組織として11月に「日本教育労働者組合」が創立されたことなどにより、大きな発展を見せた年でもあった。

2. ピオニールの組織化

1930年代におけるプロレタリア運動における教育面の中心的な担い手は、前述した「新興教育研究所」（以下、「新教」と略）と「日本教育労働者組合」（以下、「教労」と略）の二つである。「新教」には、秋田雨雀・榎本楠郎・川崎大治・本庄陸男・松山文雄など児童文学・児童文化関係者も多数参加している。また、「新教」ならびに「教労」と深く関わりを持ちながら、プロレタリア革命を実現しようとする運動の中で、独自の役割を担ったさまざまな団体・組織がその周辺には存在していた。

一つは、文化・芸術分野において専門的職能を通して運動を推進しようとするもので、日本プロレタリア作家同盟・日本プロレタリア演劇同盟・日本プロレタリア美術家同盟・日本プロレタリア音楽同盟などが該当する。もう一つは、一般大衆がそれぞれの生産や消費の場面で階級闘争を行うために組織されたもので、労働組合・農民組合・消費組合などが該当する。それぞれ本来の活動場面は異なるが、これらの団体・組織間には相互に人的な交流や支援があり、さらには組織的な指導／被指導の関係も含めて、密接な関係があった。たとえば、「新教」に属していた児童文学作家・榎本楠郎は、同時に、当時住んでいた吉祥寺周辺で組織された城西消費組合にも加入して活動していた。

そうした中で、「新教」ならびに「教労」は、ともにその創立時から学校外におけ

る子どもの組織化に強い関心を持っていた。「新教」は創立総会でピオニール研究会の設置を定め、「教労」はその行動綱領で労農少年団の組織化を掲げていた¹¹。「ピオニール」（「労農少年団」はその訳語）は、もともとはロシア革命後のソビエト連邦で、新しい社会を建設する担い手として子どもを育てるために、共産党の指導によって創設された少年組織である。日本では、子どもに階級意識を持たせ、プロレタリア運動に積極的に参加させることを目的として学校外で組織されることが目指された。そして、柿沼肇によれば、このピオニール運動では、

少年の組織化および運動の指導は労働組合，農民組合，部落解放組織（「全国水平社」）などの青年部が担当し，理論面や教材の提供，実際の授業活動などは「教労」「新教」側が責任を負うという形が取られた。¹²

ということである。

こうして、各地にピオニールを組織していくという方針の下、さまざまな組織が連携してこの活動に取り組んでいった。たとえば、1931（昭和6）年7月21日に発行された『消費組合新聞』第24号には、「関消連本部の活動」と題する以下の記事が見られる。「関消連」とは、関東消費組合連盟の略称である。

七月五日、本所柳島の帝大セツルメント児童会館にて国際消費組合デー記念、家族大懇親会を催し、約三百名の子供、遠く城西地区から押しかけた婦人達、消費組合講習所の学生、組合員等参集。プロレタリア音楽同盟の音楽があると小供達も国際消費組合デー記念の三角旗を打ち振つてこれに和し、築地劇団のプロ演劇、人形芝居、プロレタリア美術家同盟の漫画、やさしい子供にも分る消費組合や階級戦のお話しなどあり、子供はピオニールを作ることを決議し、関消連及び日消連万歳！を三唱して散会。（同紙3面）

「国際消費組合デー」を記念する、関東消費組合連盟に所属する家族の大懇親会は、当時前述した松永健哉が、東京帝国大学の学生でありながら、レジデント（住み込み専従者）として活動していた東京帝国大学セツルメントを会場として開かれた。300人の子どもたちに加えて、婦人・学生・組合員も集まったところに、日本プロレタリア音楽同盟・築地劇団（日本プロレタリア演劇同盟所属）・日本プロレタリア美術家同盟の各メンバーが、音楽・演劇・漫画を携えて来場し、参加者を楽しませたことがうかがえる。その上で、子どもたちに「消費組合や階級戦のお話し」をし、ピオニール組織化の決議が行われている。

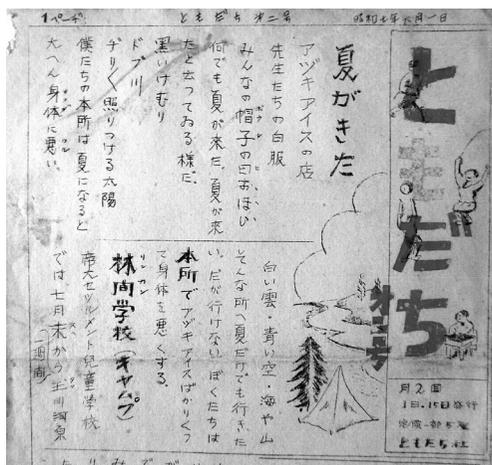
すでに新興教育研究所の所員でもあった松永健哉が、その場に同席していた可能性も十分考えられる。松永はこの直後の8月に『新興教育』のビラを配布したことで逮捕され、その放免後にいったんセツルメントを出たが、さらに10月・11月と続けざまに2度逮捕された後、再びセツルメントに戻っている。そしてその後、翌1932（昭和7）年5月には再びそこから出ている。

3. 紙芝居『黄金仮面』

ここで少し横道に逸れるが、ちょうど松永が再度セツルメントを離れた直後に、セツルメント児童部に入入りしていた子どもたちが編集し、セツルメントが発行した雑誌『ともだち』第2号（ともだち社、1932年6月1日発行）¹³に掲載された、「紙芝居」という作文を紹介しておこう（写真参照）。筆者名は「山田凹助」となっているが、これはおそらく匿名であろう。

『黄金仮面の運命や果していかにかに……サア後三銭売つてから続きをやるよ』けれど子供はぞろぞろ帰つてしまつた。『おちさんーセンブ、売つてゐてもふかるかい』『もふからないよ』『何故もつとほかの工場なんかへ働きに行かないの』『どこでもつかつてくれないんだよ。いくら働きたくてもナ』その中に又紙芝居がはぢまつたが僕はもふ面白くなかつた。（p.4）

『黄金仮面』という、いかにも『黄金バット』を剽窃したかのようなタイトルの紙芝居が実際に存在したかどうかは不明である¹⁴。さらに、筆者が本当に子どもだった



のかどうかも怪しい。この作文自体、紙芝居の「おぢさん」の「いくら働きたくても」「どこでもつかつてくれない」という、当時の都市下層階級の置かれた現実を、子どもたちに印象づけるための大人の創作と考えられなくもない。しかし仮にそうであったとしても、この作文は、初期における平絵（稚拙な挿絵から確認できる）の街頭紙芝居が置かれていた状況を伝えてくれる、貴重なドキュメントである。

4. 支配階級の宣伝媒体としての街頭紙芝居

1932（昭和7）年1月、新興教育研究所は拡大中央委員会を開催し、「一九三二年の活動方針」を決定したが、そこでは研究所の任務として、「プロレタリア少年組織に対する技術的援助」と「教育労働者、進歩的教育学生、ピオニール指導者達の理論的啓蒙」が示された。「技術的援助」として具体化されたものが、子ども向けの教育用テキストとして作成された『ピオニールトクホン』『ピオニールの友』といった冊子である¹⁵。

柿沼肇によれば、「これらの編集に直接たずさわっていたのは、浦辺史、菅忠道、松永健哉、村島雄一らであり、彼らはまた東京帝大セツルメント児童部や児童問題研究会のメンバーとしても活躍」¹⁶していた。同年3月に発行された『ピオニールトクホン』第2集には、延山潔（松永健哉の筆名）の「太陽のない街」のピオニール、川崎大治の「おいらの腕」、榎本楠郎の「プロレタリア算術」などが掲載されている。

その後「新教」は、この『ピオニールトクホン』や、さらに機関誌『新興教育』に対する相次ぐ発禁処分¹⁷に象徴されるように、政府からの厳しい弾圧によって次第に活動が困難となり、この年8月に組織を解体した上で、新たに「新興教育同盟準備会」を結成するという方針を決定した¹⁷。こうした動きに対するさらなる弾圧として、9月には幹部数人が検挙されたが、そのうちの一人が松永健哉である。前述したように、彼はこの時に転向手記を書かされている。

『新興教育』9・10月号（1932年11月10日発行）に発表された、「新興教育研究所解体声明書」には、以下の記述が見られる。

（支配階級は：筆者）文化、教育の領域に於てもラジオ、文学、映画、諸出版物、紙芝居、演劇、ショウ・ウインドウ等々凡ゆる方法を以て一般勤労大衆に欺瞞の魔手を拡げ、真実を掩ひ、革命的自覚の抑止の武器としてゐる。（p.7）

さらに同じく同号に掲載された「新興教育同盟準備会運動方針」にも、

満洲戦争以来支配階級は新聞に雑誌にラジオに講演に映画に演劇にさては紙芝居や商店の飾窓に至るまで、あらん限りの手をつくして、挙国一致を宣伝し、組織しやうとした (p.11)

とある。つまり、「新教」の指導部においては、当時の紙芝居は支配階級による反革命または戦争遂行のためのプロパガンダ=宣伝のメディアの一つだという批判的認識であったということになる。この時点での紙芝居とは、時期的にみて、またそれだけの宣伝力を保持していたということからして、『黄金バット』その他の作品によって当時子どもたちから圧倒的な人気を獲得していた、すでに平絵となっていた街頭紙芝居にほかならないと考えられる。

このような批判的認識は、「新教」だけに限られたことではなく、当時のプロレタリア運動において広く共有されていたと思われる。日本プロレタリア演劇同盟の機関誌『プロット』1932年8・9月合併号に掲載された若山和夫「組織問題の新たな発展のために」という論文では、「児童演劇に対する我々の積極的な関心を促がした主要な原因」として、「ピオニール劇団の結成」や「消費組合、無産者託児所、争議団等の少年達による極く端緒的な演劇的活動等」に加えて、次のような指摘が見られる。

更にもう一層この問題に関する我々の積極的な関心と注意を喚起したものは、最近軍部が発表した、紙芝居の全国的な統制による、児童に対するファッション化の事実である。¹⁸

続いてこの論文では、日本プロレタリア演劇同盟としての、児童演劇に関する当面の具体的な活動として9項目が示されており、最初の「イ、ピオニール劇団の組織指導」に続いて、2番目に「ロ、児童のためのレパトリーの生産（紙芝居等は有効だ）その指導」が挙げられている¹⁹。この「児童のためのレパトリー」としての紙芝居の生産は、その後実現されたようである。これについてはあらためて後述する。

5. 「ムサシノ子供会」の紙芝居「マッチ箱ノ話」

『消費組合新聞』第39号（1932年7月20日発行）の「子供ラン」に、榎本楠郎が加入していた城西消費組合が催した子供会の様子を伝える記事が、以下のように掲載されている（写真参照）。



子供だけ集り 東京城西の子供会

七月二日デーの昼東京の城西消費組合の仲好会はデー記念の子供会をやつた。みんな子供ばかりで六〇人集まつた、童謡、子供芝居、絵芝居があつて面白く一日を過ごした。(写真は絵芝居をやつてる所)

記事では「絵芝居」となっているが、写真で見る限り、これは紙芝居ではないかと推測される。

この城西消費組合では、当時榎本楠郎が居住していた都下吉祥寺周辺の子どもを対象に、常設の組織として「ムサシノ子供会」を運営していた。そこから発行されていた『子供会ニュース』NO.12 (1932年12月24日発行)²⁰には、次のような記事が見られる。

さあ来た 子供大会！

十二月二十五日の子供大会は、ムサシノ子供会が出来て初めてのしつかりした大きな集りです。(中略) お父さんお母さんたちに、私たちの作った手工や図画や唱歌や芝居を見てもらひませう。

ここには、「手工や図画や唱歌や芝居」とあるが、年が明けてから発行された『子供会ニュース』NO.15 (1933年1月14日発行)には、

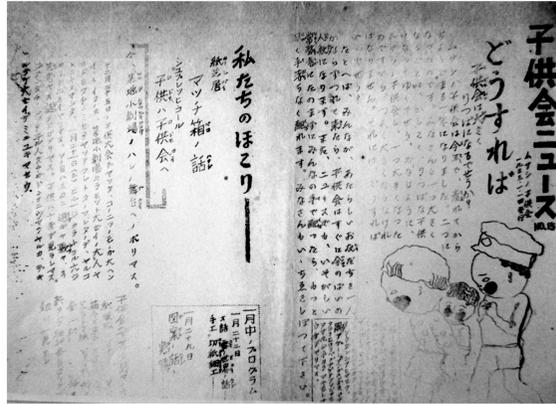
私たちのほこり

紙芝居 マッチ箱ノ話

シュプレッヒ・コール 子供ハ子供会へ

ガ、築地小劇場ノ ハレノ舞台ヘノボリマス。

十二月二十五日ノ子供大会デヤツタ、コノニツノモノガ大ヘンイ、トイフノデ、



築地小劇場カラモット大ゼイノ大人ヤコドモタチニミセテヤツテクレトタノマレ
 タノデ、ヤルコトニキメマシタ。一月二十一日（土）ヒルージカラトヨル六ジカ
 ラトニカイヤリマス。ソノ日ハホカニ遊ギヤ歌ヤ、オ芝居ヤオ話ナドガアリマ
 ス。子供八十銭デ見ラレマス。ジブンタチノシツテキル人タチガドンナニウマク
 ヤルカ、デキルダケ大ゼイデミニユキマセウ。

と記されており、前年12月25日に催された「子供大会」において、実際には「マツチ箱ノ話」というタイトルの紙芝居も演じられていたということがわかる。この紙芝居がどのような形式及び内容のものであったのかについてはまったく手がかりもなく不明だが、印刷されたものではなく、おそらくは榎本楠郎をはじめとするこの「ムサシノ子供会」に関わっていた大人たちの指導の下で、子どもたちが協力して製作した手作りのものであったと推測される²¹。

6. 「東京少年劇団」の紙芝居「小さいペーター」

富田博之『日本児童演劇史』によれば、日本プロレタリア演劇同盟の組織方針によって、1932（昭和7）年12月10日に結成された「東京少年劇団」という児童劇団が、翌1933（昭和8）年1月21日に築地小劇場で第2回公演を行っている。昼夜2回、子どもの入場料10銭であったというこの公演の「プログラム」は次のようなものであった。

少年劇団の歌（由木土也詩・市川元作曲）
 遊戯競演（地域の子供会出演）

「紙芝居の作り方」(八田元夫作)

紙芝居「小さいペーター」(佐々木踏絵)

お話「ソヴェートのコドモの一日」(秋田雨雀)

人形芝居「狼の目薬」(川尻東次作、人形クラブ出演)

やさしい絵のかきかた(田辺達)

人形芝居(マリオネット)「ネズミがネコをまかした話」(泉直哉作、加藤不味男・武内武)

お話(三島雅夫)

児童劇「パンはだれのもの？」(泉直哉作、少年劇団出演)²²

日付と場所に加え、昼夜2回の公演や子どもの入場料10銭という点も一致しており、さらに『子供会ニュース』NO.15に記載のある、遊戯・歌・芝居・お話といった演目も含まれていることから、この「東京少年劇団」の公演こそ、「ムサシノ子供会」の子どもたちが参加したものであることは間違いないと思われる。

ただし、「マッチ箱ノ話」というタイトルの紙芝居はプログラムには見当たらず、「紙芝居の作り方」と紙芝居「小さいペーター」という二つの演目が見られるだけである。「マッチ箱ノ話」は正規のプログラムではなく、あくまで子どもたちの演じる余興という扱いだったのかも知れない。

二つの演目の具体的な内容についてはまったくわからない。前者は、「紙芝居の作り方」というタイトルの児童劇かも知れないし、あるいは舞台上で紙芝居の作り方を指導したとも考えられよう。しかし、少なくとも後者は、紙芝居作品「小さいペーター」が演じられたと理解してよいのではないだろうか。そうであるならば、この作品は、前述した日本プロレタリア演劇同盟が当面の具体的な活動として提唱した、「児童のためのレパトリー」として「生産」されたものの一つであると考えられる。

さらに、同じく1933(昭和8)年の3月に発行された『消費組合運動』第2巻第3号には、城南消費組合の組織宣伝部による、「家庭会について どんな意見が出たか?」という記事が掲載されている。家庭会とは、組合員が家族単位で集まって、親睦を深めながら結束を高めるために開かれた会合と推測される。この記事は、そこに実際に参加した人たちに、「家庭会をどうしたら一番面白くそしてためになるか」について意見を聞いた結果の報告である。ここでは、家庭会でおもしろかったこととして、「紙芝居」「宮崎さんの紙芝居が面白かった」といった意見が見られ、さらに子どもが飽きないようにするには、「紙芝居でもやつて貰ひたいと思ふ」という声も紹介されている(同号、p.86~92)。

以上のように、当時のプロレタリア運動において、子どもを組織化しようという目

的の下、さまざまな場面で紙芝居が利用されていたということが確認できる。そしてその紙芝居は、もちろん印刷されて大量に頒布されたものではなく、各地で独自に製作された、いわば手作りの紙芝居作品であったと推測される。

7. 子どもの組織化を目的とする紙芝居

消費組合の家庭会における紙芝居利用を報じている、前述の『消費組合運動』第2巻第3号（1933年3月発行）には、さらに消費組合の子供会をめぐる論考が2本掲載されている。

まず一つめは、東京第一合同消費組合に所属する岡本重夫の「子供会について 少年問題は断じて二の次でない」である。この中で岡本は、組合員家庭以外の子どもを対象とする啓蒙的な活動において、そうした子どもを集めて訓練する際には、「其の為の手段として紙芝居、復習会スポーツ何でも豊富に利用する事は必要である」（同号、p.109）と述べている。

二つめは、先にも紹介した城西消費組合に所属する児童文学者榎本楠郎の「消費組合子供会に対する私見—城西のピオニールの経験—」である。前述したように、吉祥寺周辺で「ムサシノ子供会」に関わってきた榎本は、組合員ではない、地域の一般家庭の子どもたちを巻き込んで、実際に子供会を組織した経験から、子供会を組織・運営するための具体的な方法を明らかにしている。その中で、集まってきた子どもたちに対して、はじめのうちは統制が取りにくいので、「面白さ—興味中心のもので子供の心を捉える」ことの必要性を訴え、その例として「お話・唱歌・紙芝居・遊戯・遠足・図画・等」（同号、p.117）を挙げている。

1933（昭和8）年8月20日発行の『消費組合新聞』第64号に掲載された「築地の「子供の夕」」という記事には、7月26日に各地の子供会から約100人の子どもが集まり、劇などの競演会が開かれたことが報じられている。その中にも、「柳島子供会の紙芝居や寸げき『あはてるな』アツマ子供会の芝居『ナツトウリ』、ユーギ『せんたく』は大評判だつた」とある。

このように、1930年代におけるプロレタリア運動の一環としての消費組合運動では、広く子どもを組織することを目的とした子供会活動において、実践的にも理論的にも、紙芝居を利用することが一般化されていたのである。

おわりに

本稿で見てきたように、1930年代初頭におけるプロレタリア運動の中では、街頭紙芝居が支配階級の宣伝媒体として批判的に認識されるとともに、子どもを組織化する手段として、おそらくは手作りの紙芝居が使用されるようになっていた。こうした状況を、同時期に新興教育研究所所員ならびに新興教育同盟準備会幹部として活動していた松永健哉が、まったく認識していなかったとはむしろ考えにくい。学校外で子どもを組織化する際に、紙芝居が有効なツールであるということは、児童問題研究会を結成した松永及びその同調者たちにとっては当然の理解ではなかったであろうか。

児童問題研究会は、新興教育研究所が政府の弾圧によってその活動が困難となった後、その意図を継承する「合法活動の場」²³として設けられたという性格を持っているとも評価されている。そのため、「ピオニール、労農少年団といった階級闘争の用語は、『児童問題研究』会誌においては回避されている」²⁴とも言われている。転向手記を書かされた松永健哉にとっては、特高の監視下でありながら、公然とそうした用語を使うことは不可能であり、むしろ自身の転向を監視者に向かって積極的に示すという意味で、また同時に雑誌読者に対して自らのプロレタリア運動活動歴を隠すためにも、そうした用語を避けたと考えられる。

仮にそうであるならば、前述したように、後に松永自身はその紙芝居製作のきっかけを、今井よねの福音紙芝居に出会ったこととしているが、その言説も、あるいはプロレタリア運動におけるその活動歴を隠すためのものであったとも考えられることになる。

同じことは川崎大治にも言える。川崎は楨本楠郎とともに「ムサシノ子供会」に参加しており、その活動において紙芝居が使用されていたことは明らかである。しかし、管見する限り、川崎が自身の紙芝居との関わりをめぐって、「ムサシノ子供会」での経験について書いたものを見出すことはできない。

1930年代初頭のプロレタリア運動における紙芝居の足跡は、その関係者自身によって封印されてきたと言えるのかも知れない。

注

- 1 石山幸弘『紙芝居文化史』萌文書林、2008年、p.50。
- 2 同前、p.208。
- 3 高塚明恵「印刷紙芝居の黎明 今井よねによる紙芝居の出版と発展」『児童文学研究』第50号、日本児童文学学会、2018年、p.53。
- 4 「平絵紙芝居」第一作とされる『お伽の御殿』の絵を描いた永松武雄の記述による（永松健夫「『黄金バット』のころ」『紙芝居』第8巻第1号（復刊第3号）、日本紙芝居協会、1947年12月、p.12）。なお、前掲3をはじめ、『お伽の御殿』というタイトルを『魔法の御殿』とする資料も多いが（他に、加太こうじ『紙芝居昭和史』立風書房、1971年など）、ここでは永松の記述通りとした。現物は今日まで発見されておらず、確認不能である。
- 5 前掲3、p.54。
- 6 同前。
- 7 『百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第19号、2016年3月、所収。
- 8 拙稿「松永健哉と紙芝居『人生案内』」（前掲7）においても言及したが、松永健哉「紙芝居自叙伝（1）」『紙芝居』第5巻第1号、日本教育紙芝居協会、1942年1月、p.17。
- 9 『児童問題研究』第1巻第1号、東京帝国大学セツルメント、1933年7月（白石書店より復刻、1977年）、p.86。
- 10 同前。
- 11 柿沼肇『新興教育運動の研究』ミネルヴァ書房、1981年、p.231～232。
- 12 柿沼肇「浦辺史と新興教育運動」『日本福祉大学社会福祉論集』第114号、2006年3月、p.23。
- 13 現物は個人蔵。なお、誌面中に「帝大セツルメント児童学校では、七月末から一週間、玉川河原へキヤムプに行く」（p.1）といった記述が見られ（写真参照）、『東京帝国大学セツルメント十二年史』（東京帝国大学セツルメント、1937年）に掲載されている「児童部史」の「資料」として、『児童問題研究』などとともに「友だち（第一号—五号）」（p.100）という記述があることから、表記に若干の違いはあるが、同セツルメント発行と判断した。
- 14 前掲1によれば、『黄金バット』という名称の由来として、「江戸川乱歩の『黄金仮面』の影響があったとの説」（p.46）もあるとのことである。ちなみに江戸川乱歩の『黄金仮面』は、雑誌『キング』1930年9月号（大日本雄辯會講談社）から

連載が開始されている。

- 15 前掲11、p.244～245。
- 16 同前、p.245。
- 17 なお、当時文部省学生部が作成した内部文書『プロレタリア教育運動 上』（1933年4月、『『新興教育』複製版 第9巻』『新興教育』複製版刊行委員会、1967年、所収）に掲載されている、「新興教育同盟準備会東京支部準備会組織図（昭和七年八月現在）」（同書、p.130～131）には、東京支部準備会委員の一人として延山潔（松永健哉）の名前が記載されている。さらに、同支部の下に地域別に設けられた6つの地区のうち、江東地区では延山潔がその責任者を兼任しているが、城西地区の委員として川崎大治と榎本楠郎の名前が見られる。弾圧する側である文部省が作成したこの組織図が、はたして事実かどうかについては慎重に検討する必要はあるが、この運動の中で、松永・川崎・榎本がきわめて近い関係にあったことは認められると言ってもよいだろう。
- 18 『プロット』1932年8・9月合併号、日本プロレタリア演劇同盟機関誌部、1932年8月、p.64～65。なお、紙芝居に対する軍部のこうした動向については、すでに石山幸弘が前掲1のp.52で紹介している。
- 19 同前、p.66。
- 20 「ムサシノ子供会」発行の『子供会ニュース』は、神奈川近代文学館所蔵。
- 21 なお榎本楠郎は、1939（昭和14）年1月発行の『教育紙芝居』第2巻第1号（日本教育紙芝居協会）に寄稿した「紙芝居に対する期待」という小文において、「もう七年ばかり前のことであるが、私は校外教育の実践のために「子供会」をつくり、そのとき初めて紙芝居を利用して、その効用の大なることを認めた」（同号、p.4）と記している。7年前といえは1932（昭和7）年であり、この「子供会」が「ムサシノ子供会」であることは間違いのないと思われる。また、川崎大治はその榎本没後の追悼文「榎本楠郎さんの思ひ出」において、昭和7年頃のこととして、「地もとの吉祥寺には、ムサシノ消費組合という、台所を守る大きな組織があつたので、組合員の子どもを集めて「子ども会」を作つたりもしました」（『新日本文学』第112号、1956年11月、p.98）と回想している。正確には「城西消費組合」の「ムサシノ子供会」であるが、川崎大治もそこに関わっていたという事実は、後に日本教育紙芝居協会で精力的に紙芝居製作に携わった川崎にとって、この「ムサシノ子供会」がその原点の一つであったことも考えられるという意味で興味深い。
- 22 富田博之『日本児童演劇史』東京書籍、1976年、p.196～197。なお、この「プログラム」の現物は、今のところ白百合女子大学児童文化研究センターの富田博之

文庫にも見当たらず、所在不明である。

23 上平泰博「児童問題研究会」久保義三・米田俊彦・駒込武・児美川孝一郎編著
『現代教育史事典』東京書籍、2001年、p.437。

24 同前。